情動、フォネー
― エマの恐怖と「ねずみ男」 ―

本　間　邦　雄

はじめに

前回の論文(「ジャン=フランソワ・リオタール『哲学の悲惨』に関する若干の考察」,『論叢』第29号所収)では,『文の抗争』(1983年)にはじまり『哲学の悲惨』(2000年)にいたる,〈文〉の哲学に焦点を当てた。そしてことばで述べられる〈文〉だけではなく,感情や情動についても〈情動 - 文〉として考察すべきことが明言されるリオタールの思考の経緯に着目した。そのような〈情動 - 文〉は,「それが分節化されていない点[1)]」で,通常の文と区別されている。なお,「分節化」といっても,それは言語学的な意味には限られなかった。

それには,二つの面からの説明があった。ひとつは,ふつうの〈文〉と違って,〈情動 - 文〉は,〈文〉の〈宇宙(ユニヴェール)〉(ないしは〈領界(ユニヴェール)〉)を呈示しないことである。ふつうの〈文〉は原則として,〈送り手〉,〈受け手〉,〈指向対象〉,〈意味〉の4つの審級ないしは極に分節されて,それらによってしかるべき関係,場面,内容が〈宇宙〉として呈示される。しかし〈情動 - 文〉では,そのような〈宇宙〉は分節されて呈示されない,開かれない。それが呈示するのは,それがあること,いわばその気配のみである。“そこ”に“何か”があるのではなく,何かが(ないしは何もないという事態が)“ある”ということだけである。沈黙であり,沈黙が“ある”。もうひとつの説明は,言語的に分節されていることば(ロゴス)にたいして,〈情動 - 文〉は分節化されていないフォネー(泣き声,鳴き声)にもあたることである。それは,言語を獲得するまえの,あるいは言語に支配されることに身をまかせざるをえない幼年期の問題系にもかかわる。

前稿では以上のような〈情動 - 文〉についてのリオタールの定位を見たうえで,その展開をたどりつつ,リオタールの思考が求めるもの,すなわち近代の思考がおちいっている主観主義の閉塞状況,あるいは客観主義をよそおった,緊張を欠いた自動的な,結局,権力的な思考に回収される科学主義,それらの硬直を,複数の錯綜する線や変換する極の運動の場に置いて,新たに読み替えていく思考の様態を考察してきた。

本稿では,以上のような〈情動 - 文〉の思考の具体的展開の哲学的なねらいとその

現場を定めたい。リオタールが「情動」をめぐって主題的に取り扱った内容が，哲学的な問題の，思想的な結節点として，他者のテクストや問題点とどのように切り結ぶのか，その点を主題的に考察したい。

リオタールはみずからの哲学的主張について，次のように語っている。

> 私はここで，哲学的主張を維持することにつとめたい。すなわち，理解可能なしかたで，分節可能なものの手前について，つまりなんらかの無（Nihil）について，それはまた，その主張そのものを突き動かす当のものなのであるが，それを分節するという試みである[2)]。

ここで言われる「分節可能なものの手前」が，分節化されていない〈情動 - 文〉にかかわることは明白である。それはまた，分節化された宇宙を呈示しない以上，なんらかの「無」としか言えない。しかしそれは何もないということではない。悟性ではとらえられないものであり，また感性の形式に現象としてかたどられるのでもなく，あるいは想像力によって形象化できるのでもない。すなわち表象としては空虚であり無であるが，たんなる思考の空転ではなく，世界のなかに絡みとられている人間の身心，それもリオタールのことばで言えば「悲惨[3)]」な身心と切り離せない思考が，その限界を分節化しようと試みるときの相関的な「無」である。しかもその「無」は，ひるがえって，彼の「哲学的主張」を沈黙のうちにむしろ鼓舞し，奮い立たせる当のものであるとリオタールは言う。

そのような「分節可能なものの手前」である，分節化されていない〈情動 - 文〉を考察してゆくために，つまりその〈文〉をそれなりのしかたで分節化してゆくために，リオタールが特に注目するのが，精神分析である。リオタールが，精神分析に関心を寄せるのは，精神分析が基本的に，言述（ディスクール）にかかわるからである。それも，分析家と患者で取り交わされる現場の発語である（talking cure）。〈文〉の哲学を志向するリオタールが，いろいろな意味で，文のやりとり，文の連鎖のうってつけの現場である精神分析に考察の対象を定めるのはしごく当然であろう。

しかも，分析家と患者のやりとりにおいては，患者のよく整理された話が望まれるというよりも，自由連想が勧められる。そしてしばしば，ちょっとした言い間違えや，患者にとっては付け足しの連想が，当人にとって重要であるのに気づかれていない思考内容に結びつくことがよくあることも知られている。そしてときには，沈黙や，言いよどみ，思わぬ感情の表出なども意外に重要なしるしとなりうる。このような点で，〈文〉のなかでも，特に〈情動 - 文〉を設定するリオタールの問題領域と重なるとこ

ろが大きいのである。

もちろん，治療を目的として，患者の言述を自由連想と転移も交えて分析しつつ導いてゆき，診察の時間や回数も問題になる精神分析と，日常生活における「文」，書物の「文」を環境とし，また権利上は時間にしばられない「ボランティアの[4]」哲学の違いがある。双方の言述のえがく軌跡は異なりもするだろう。しかし，その交叉に立ち会うならば，未知の，刺激的な思考を経験する機会となりうることも予想されるだろう。われわれは以上の観点から，フロイトのテクストを読むリオタールを見てゆきたい。

I 症例エマ

フロイトの『科学的心理学草稿』(1895年）に出てくるエマの症例は，しばしば研究者によって言及されているが，リオタールもすでに『ハイデガーと「ユダヤ人」』(1988年）のなかでフロイトの「無意識的情動」に関連して取りあげていた。「無意識的情動」は，抑圧されても「無意識」のシステム（心的装置）のなかには残っている「無意識的表象」と違って，心的システムのなかで実際に発芽せずに萌芽の可能性としてとどまっている[5]。リオタールは若い女性患者エマの症例に，そのような「無意識的情動」を見るのである。

前稿でも少しふれたが，『哲学の悲惨』においても，独立した「エマ」の論考がある。それは，前稿で考察した〈情動 - 文〉の展開の重要な例として位置づけられている。そこで本章では，まずエマの症例そのものについて具体的に概観する。それからフロイトによるその分析を参照し，そのうえで当の症例についてのリオタールの考察，取り上げる角度，およびそこから引き出される意味を考えたい。

1 エマの恐怖感（Schreckaffekt）

フロイトは次のようにエマの症状を紹介している。

> 現在エマは，一人でお店に行けないという強迫に支配されている。この強迫を論議するには，彼女が12歳（思春期直後）の時のある回想を問題にせねばならない。その二人のうち一人が，彼女の回想の中に出てくる男なのであるが，彼女はあるお店に買物に行って，二人の店員が互いに笑いあっているのを見たのである。しかもその時，彼女はなぜだか分からないが，恐怖感(*Schreckaffekt*)におそわれて走り去ったのである。その上，二人の店員は彼女の着ているもののことを笑ったのだという考えと，一方の店員に彼女が性的魅力

を感じたという考えが喚び覚まされている[6]。〔強調は原著者〕

現在，エマはひとりで商店に入ることができないという強迫にとりつかれている。現在のエマを t_0 としておこう。そのきっかけは，思春期にさしかかった12歳のときの出来事であったと当人は回想する。この12歳のエマを t_1 としよう。この t_1 の出来事はたしかに不可解である。その店に入ったとき，少女の着ている服がアンバランスかなにかで滑稽だと店員たちに思われたと少女が感じたとしよう。そのことに気づいて恥ずかしくて店を飛び出したなら，今度は思春期のおませな少女としてそれなりのおしゃれをして出直すことだって考えられる。ところがエマは恥ずかしさではなく，「恐怖感」におそわれたのだ。さらに不思議なのは，二人の店員のうち片方に性的な魅力を感じたという考えが彼女によびさまされていることである。魅力的なタイプと思ったのに，なぜ「恐怖感」に駆られて逃げ出すのか。牽引と反撥という相互に反する力が，道徳的な規範となかば無意識な欲望との葛藤として，同時にはたらいていると考えることもできるかもしれないが（そしてこの場合は後者が優勢であった），それなら思春期特有の一時的混乱であり，彼女のなかでもそのように把握されるだろう。ところが，この「恐怖感」は，ひとりでお店に入ろうとするとき，だれと対面するかにかかわらず毎回おこるようである。さらに，ひとりではお店に入れないが，だれかといっしょならば，たとえそれがこどもであっても平気で入れるというのであれば，実効的な自己防御が問題であるとも思えない。もちろん，服装の首尾如何が店の敷居をまたげるかどうかの成否のポイントとも思えない。ひとりでお店に入れないという彼女の強迫観念は不可解である。

やがて，その背後に，さらにさかのぼるもうひとつの出来事があることが明らかになる。エマが8歳のときの出来事である。それを t_2 としよう。彼女はある食料品店にひとりでお菓子を買いに行った。そのときその店の主人が，にやにや笑いながら衣服の上から彼女の性器に手で触れたという記憶である。しかし，この記憶は，t_1 の回想が浮かんだときにはまったく思い浮かばなかったという。

フロイトによれば，この t_2 の出来事から，t_1 の出来事が理解できるようになる。ポイントは，笑いと衣服である。つまり，店員たちの笑いが，エマにおいて，以前，食料品店主が彼女にいたずらしたときのにやにや笑いに無意識的に結びつけられる。ただし本人のエマは，その結びつきには気づいていない。t_2 時と同様に今回もエマはひとりで来ている。しかし，今回は彼女は思春期に達していた。そのため，その無意識的な回想は，性的エネルギーの解放をうながす。しかし，その連関はエマには意識

されていない。t_2時の複合観念（笑い，商店主，衣服，いたずら）のおおかたは意識の下に押しとどめられたままである。したがって，そのゆがみによって，エマのなかでは「この性的な解放が不安に変形されている[7]」。エマは，われ知らぬ不安にとらわれる。今回（t_1時）の店員の笑いにむすびつくものとしては，t_2時の複合観念のなかでもっとも無害な「衣服」の観念のみが浮びあがっている。エマの意識にあらわれるのは，店員の笑いと「衣服」であり，そのもとに性的情動が不安として解き放たれ，本人は「なぜだか知らない恐怖感におそわれて」逃げ去る。そして，店員に衣服のことで笑われたという観念と，性的感覚がよびさまされたことを示しもする，男性店員の性的魅力の自覚という記憶が残った。

フロイトは次のように言っている。

> ここで論じられているのは，ある回想が情動を喚起するが，思春期に生じた変化が回想内容の理解を変えてしまったために，体験そのままの回想がではなく（性的成熟後の回想内容の理解が）情動をおこしたという症例である[8]。

このように，t_1の場面において，自分がひとりでいることと二人の店員の笑いが，片方の店員に性的魅力を感じたということとも関連して，今まで意味もわからぬまま抑圧されていたt_2場面と無意識的にむすびついた。このときは性的に成熟しはじめていたので，ひとりの店員が気に入ったことでもうかがわれるような，量的に無視できない性的解放が呼び覚まされた。しかし，その性的な解放は，t_2の場面での未萌の情動と直結して，そのときの厭うべき性的意味がなんらかのしかたで事後的に再構成されたので，t_1の場面ではなんの危険もなかったにもかかわらず，その情動はこの事後的な精神的外傷のために不安に変形されて，恐怖感として自覚された。

そのとき，そのt_2の無意識的な回想内容の把握が，いちばん抵抗のないかたち（「二次的抑圧[9]」）でおこなわれ，t_1（およびその後t_0）の意識には「笑い」と「衣服」として定着していた。

2　リオタールの考察

2-1 情動 - 文

それではリオタールはこの症例に何を見るのだろうか。まず，t_0，t_1，t_2の順序についてであるが，時系列的には，t_2，t_1，t_0の順で進むから，逆にしたほうがいいように思われるかもしれない。だが，エマがフロイトの前でおこなった回想の順序とし

ては，t_0, t_1，t_2の順なので，このほうがむしろふさわしいとも言えることが確認される。

リオタールは当然，情動を〈情動 - 文〉としてとらえる。沈黙もひとつの〈文〉になることができる[10]。無意識も一つの〈文〉として到来しうる[11]。ただ，その〈文〉は「分節されていない」。こうして，「無意識的情動」もひとつの〈文〉として俎上にのせられる。

幼年期の〈情動 - 文〉について，リオタールは次のように述べる。

> フロイトが入念に考察していることは，〔われわれの言いかたとは〕別の言いかたがされているにしても，指向対象性と送り手 - 受け手の分極化にかかわっている。もしその文が「分節化」されているならば，それぞれがあいまって，ひとつの文の宇宙を構成するものであることを私は示していた。しかし，幼年期の情動の文（あるいは「性的な」文）の特徴は，それが指向対象をもたず，また差し向け相手もないこと，対象の軸にそって分節されもしなければ，宛先の軸にそっても分節されないことにある[12]。

このように，〈情動 - 文〉は，意味はもちろん，発信人も受取人も指向対象も分節されていない。たとえフロイトの分析治療の現場で，エマにおける「恐怖感」という情動が察知されるにしても，それを直接，指向対象として連鎖していくことはむずかしい[13]。つまり，なにか恐れが「ある」ということだけを指向対象にしたとして，どのような〈文〉を接続すればよいのかわからない。それについての，エマ自身の連想（連鎖する〈文〉）も，上記のように不可解なままである。しかし，フロイトは，不可解な情動そのものに鍵があることを予測する。

> エマは，分節された言語の不信に苦しんでいる。フロイトは，その原因を情動の「過重」に帰している。「失われた時間」は，エマの通時的時間に「あまりに」ひんぱんに到来する[14]。

診療室において「治療を導く種類の文は，情動[15]」である。こうして，エマの自由連想や聞き出しのなかで，つなげるべき文を探すというエマとフロイトの共同作業がなされる。不安の織り交ぜられたもろもろの文のなす綾目のなかで，連鎖しうる可能性のある，なにか他の文のあらわれを待つのだと思われる。このような状態のエマとのやりとりのなかで，思いつくさまざまな連想のなかで，t_2の場面の回想がゆくりな

くなされたと思われる。

彼女は連想をしているあいだ，(フロイトに)“私”と言う。フロイトが彼女に質問したり，彼女を観察したりしているとき，彼女はフロイトの応答者〔＝“あなた”〕である。そして商店主が彼女を誘惑するとき，彼女は商店主の応答者でもある。フロイトが彼の分析について私たちにゆだねる報告においては，彼女は指向対象〔＝“彼女”〕の位置にある[16]。

このようにエマは，“私”と“あなた”と“彼女”の３つの人称の位置をとる。彼女はそのような文で構成される複合的な円環の連鎖のなかで脈絡がつけられ，綜合的に定位され，解釈されてゆく。

2-2 事後性 (Nachträglichkeit)

こうして，エマとフロイトとのやりとりのなかで，遅れて到来した t_1 ないしは t_0 の情動が，t_2 の「事後性」としてとらえなおされる。

事後性は，このような〔時計的な〕時間の考慮を要求する。というのも，それが想定するのが，その衝撃は，言ってみれば t_2 時にあたえられたが，しかしその「効果」(情動)は，t_1 時ないしは t_0 時になってようやくあたえられたのであり，t_2 と t_1 ないしは t_0 のあいだの隔たりは，おそらく正確に測られる必要はないにしても，それでもなお，時計の時間を，少なくともカレンダーの時間を要求する，ということであるからである[17]。

まず，時計的時間のずれ，時差があるということが認められる。けれどもこのような「事後性」は，さらに通時的な時間の秩序をかきみだす。あるいは通常の時間構成，つまり整序される時間から抜け落ちる，それとは別な編成のされかたのありうる時間の問題を浮かび上がらせるかたちで，問いをつきつける。

しかし，事後性はまた，年代順的な時間をきっぱりと否定する。つまり，t_2 における衝撃から「生じた」情動はそこで起こらず，それは t_1 において起こる。しかし，t_1 においては，それは再認されず，また位置づけもされない。ひとつの新しい感情，ひとつの恐怖として起こる。それから，それはいつも思いがけないしかたで繰り返される。したがって，フランス語の言いかたで，「あらためて」(une « nouvelle fois ») というしかたで，つまり

最初であるとともに繰り返されて t_0 までいたる。そこでエマはフロイトの長椅子に横になってそれをようやく「意識的に」（とフロイトが言っている）体験する。つまりその源泉（刺激をあたえたもの）の位置を t_2 として突きとめつつ，それを表象的に文として話し，こうしておそらく，それを「清算する」のである[18]。

そもそも出来事は，〈文〉の順序としては，t_0，t_1，t_2 の付加数字のように，現在の t_0 から出発して t_1，t_2 と遡及的に起こっている。第一に，その“遡及”自体が“現在”の理解を構成していることに注目しなければならない。“遡及”することが“現在”のエマを構成するのである。そのうえで，それらを年代的に t_2，t_1，t_0 と並べてみよう。t_2 における衝撃の「効果」が，そのとき起こらず，t_1 と t_0 において遅れて生じているように見える。けれどもそれは，結果論的な整理にすぎない。あるいはただ，要因を単線時間的に機械論的に見た場合である。というのは，原理的にありうる別な要因（それは t_3 ないしは，t'_0 としてマークされるだろう）の到来によって，大幅に組み替えられる可能性はつねにあるからである。

したがって，ことの実質的な内容把握をはかるとすると，精神分析的な内容把握としては，あとに起こったこと（t_1）が，先に起こったとされる内容（t_2）を変化させる原因となったとも言える。原因と結果が，時間の前後関係と逆転している（「症候において以後的なもの（第二撃）が，以前的なもの（第一撃）の《前》に起こる[19]」）。あるいは，通常の通時的時間とは別なレベルの時間性を考える必要が生じる。時間性そのものへの問いとなる。つまり日常的に整序される時間を断ち切るかたちで，「通時性のない時間」，「無意識的情動の時間[20]」が不定形で，漠然とした，当惑させるものとして意識をおびやかす。

2-3　情動の「現前」

それでは，t_2 時に「情動」はあったのだろうか，なかったのだろうか。フロイトにおいては，若干逡巡が見られ，曖昧であるとリオタールは言う[21]。しかしリオタールにあっては，結論を先に言えば，情動は「すでにある[22]」のである。t_1 時の性的成熟が回想を性的意味に再解釈して，そのことがきっかけではじめて t_1 時に情動が生み出されたのではないとリオタールは言う。リオタールは，つねにすでに漠たる情動が滞留していると考える。それでは，その理由を見ていこう。

まず，なぜ，漠たる滞留であるのか。商店主による猥褻行為のとき，商店主の意図する意味を，こどものエマは自覚的に受けとめたのではない。またエマにあって，そ

の行為が無意識的に早熟的に（未消化なかたちで先取り的に）受けとめられていたのでもない。あるいは，記憶表象にともなって（過去を思い出して），以前になかった情動が性的成熟期にさしかかったエマによって t_1 時にはじめて産出されたのでもない。幼年期（８歳のエマは必ずしも幼年期とは言えない点はリオタールも言及しているが，原理的に言って）の自己同一性が未然的なのである。未熟であり確立されていないのである。

> 実際は，最初の衝撃である快と苦痛を防ぐための，すでにそこにある自我というものはないのである。……t_0 における情動は「後に生じた」ものではない。その情動は，いつも通り（どんな場合も），単純な「現前」なのである。ただ自我が，それをひとつのもの〔une chose〕（ないしはひとつの非 - もの〔une non-chose〕）として幻覚化し，それを埋葬してしまっていると信じていたのである[23]。

このように，衝撃を，意味ある衝撃として受けとめる自我は構成されていない。最初の衝撃のもたらす「情動」は，影響をおよぼすにはあまりに早く，実現するにはあまりに遅いかたちで，エマの“内”と“外”に定位されずに“ある”。つまり，つねにすでに「現前」している。エマにとっては，無意識のうちにあるが定位されていないため，のちに“外”からやって来るものとして（恐怖として）あらわれる。お菓子を買いに行った幼女にとって，最初の衝撃は，異様なとも言えない，意味不明な不思議な出来事にとどまる。

その衝撃を〈文〉として考えてみよう。一言で言えば，その衝撃＝一手(coup)は，幼年期には未知の言語ゲームなのである。

> こどものエマはあたえられた（快と苦痛の）言語を話し，一方，商店主は，同じ趣き（情動的）であるが彼女には未知の言語で，彼女に話しかける〔＝差し向かう〕というように想像することができるだろう[24]。

エマは，おとなの〈情動 - 文〉の差し向けの対象となる。商店主の情動が差し向けられる。この点で，明らかに t_2 時には商店主の情動がはたらいている。しかし，このように未知の言語で話しかけられるとき，エマはそれをそれとしてとらえることができない。商店主の情動は，どのような意味でも受けとめられず（つまり受け入れられ

ないだけでなく反撥されもせず)，空振りし，行き場がなくなる。

> 話し手は私たちに話しかける〔＝差し向かう〕が，私たちは，本来の意味でそのことで話しかけられる〔＝差し向けを受ける〕ということなしに，ただその「差し向け(アドレス)」によって触発(アフェクテ)されるということしかなされない。こうして，エマは，商店主のくだんのふるまいであるその文によって，彼の「宛先となる(アドレセ)」ということができないまま，触発されるということである[25]。

そして，そのとき(t_2時)に宛先とならないまま触発される「情動」は，自我の形成されていないエマにとって，〈情動 - 文〉としては送り手も受け手もなく，指向対象ももたない。とりとめもない漠たる靄のようなものである。

> 私という審級が，幼年期の情動文に欠けているのと同じしかたで，第二人称，つまり宛先人(*addressee*)の審級も，その文には無縁である。そのことによって私が言いたいのは，その文が（その「現前」を意味することなく）そうであるところの「現前」は，要求としても応答としても，だれに差し向けられもしないということである[26]。

このように，そのときに生じうる幼年期の情動文には，（それなりに）自己同一的にしつらえられた「私」という審級はなく，したがって宛先もない。その情動文の「現前」は，だれにも差し向けられないというかたちで，エマの“内”と“外”で(というのは，事後的に顕在化するときは，エマの“内”にかかわるにもかかわらず，“外”からの恐怖として意識されるからである)靄のように存続するのである。

> ひとつの争異(ディフェラン)と呼ぶべきものから結果するその衝撃は，それ以降，エマの情動性(affectivité)において表象のない情動として滞留する[27]。

こうしてリオタールは，このような行き違いに争異(ディフェラン)を見る。幼年期の快と不快の情動文と，おとなの情動文ではゲームの規則が異なっている。それはエマにとって，不当な交錯であるとわれわれには思われる。しかし，それが実際どのような出来事であったか詮索するよりも，このような交錯に，幼年期に不可避的なひとつの組み違いの原型を見るのがいいと思われる。当人にとっては，何がなんだかわからない不可思議であった。にもかかわらず，というよりもだからこそ，その「情動」がどこ知れず

滞留するのは，二度行ったという回想にもうかがえる[28]。「あらためて」(une « nouvelle fois ») である。

商店主にたいする倫理的な非難の問題は残るだろうが，またこどもにたいして圧倒的優位にあるおとなの責任は減じられるべきではないが，その問題はここではあつかわない。ここでは，個別の商店主から離れて，おとなとこどもの文の争異(ディフェラン)に着目すれば，実はそのようなおとなについても，いつも安定して分節された文意明白な〈文〉に定位されているわけではないことがわかる。

> 心神阻喪か倒錯か，彼のふるまいは，おとなもまた，こどもと同様に，《興奮》の不意の機会のなすがままになることを示している[29]。

このように「商店主」は，彼自身，幼年期の情動にかかわる「《興奮》の不意の機会のなすがまま」になっている。「商店主」の行為は，おとなも，幼年期の情動，幼年期の組み違いから離脱しているわけではないことを示している。そして形式的に言って，彼を例外として見るいかなる理由もない。つまり，構造的には，おとなはいつでも，逸脱行為におよぶかどうかは別にして，「商店主」になってしまっているのである。それがリオタールによって摘出される新たな側面である。こんな「商店主」は，ふだんはにこやかで親切で，おとなの分別をもった好人物に見られているに決まっているのだ。しかし，その分別にみちているようなおとなの〈文〉のはざまで，またその〈文〉の裏地には，いかなるものであるにせよ，幼年期の組み違いによる分節化されない情動が波打っているのである。

> 情動の「現前」，情動の純粋な自己指示（la pure autonymie de l'affect）は，現前化(présentation)にも，表象化(représentation)にも翻訳できない。このような情動性と分節化のあいだで，争異(différend)は不可避的である。それを係争(litige)（「さあ，聞き分けをよくしましょう…」）に解消することも，そこから抜け出すこともできないだろう。反対に，分節化された成人の文こそが，いつもあの受動性というものを目覚めさせる（刺激する）ことになるのだ。そしてその目覚めがもろもろの分節化の流れのなかで鬱滞となり，それが今度は，あの「現前化できない《現前》」(cette présence «imprésentable »)を感知させるものとなるのである。刺激するものが刺激をこうむり，狩るものが，狩られるのである[30]。

以上から，哲学的な思考で言えば，人は原理的にだれもが「商店主」の位置にもエマの位置にもあることを認めなければならなくなる。分節化された〈文〉の綾なすくっきりした絵模様に織り込まれているかに見えても，実は人間はつねに，幼年期の文の巻き込み，幼年期の組み違いに絡め取られ，「現前化できない「現前」」の潜熱にわれ知らずうなされることになるのである。

Ⅱ フォネー

1　分節化されている声と分節化されていない声

「情動」は，沈黙の声となって，あるいは声と声のはざまに，省略，言いよどみ，詰まり声，ときには素っ頓狂な声となって現象する。その沈黙の声，気配を，あるいはよどみの声，突発する声をいかに，他のことばにつなげていくか，分析者とのやりとりで腑分けしていくか，編みこむか，補っていくか，そして架橋するか，その共同作業の現場が精神分析とも言えよう。

精神分析において，「声」の記入状態には３つの種類，３つのシーンがあるとリオタールは言う。①症例と治療が報告してまとめられる口頭発表やその公刊文書に現われる声，つまりフロイトを通して位置づけられ報告された患者の声。②患者の病んでいる生が語られるとみなされる一連の精神分析の診療時間における声，つまり治療の場面でフロイトに向けられた患者の声。そして③患者の生そのものにおいて発せられた声，患者自身の生活における声である。おおづかみに言えば，③の生の声を指向対象に②の相互的分析作業が語られ，その②を指向対象に①の報告が語られる。

このような「声」を考察するために，リオタールは，フロイトの報告する症例，通常「ねずみ男」とよばれる症例を『インファンス読解』(1991年）でとりあげている。フロイトの「強迫神経症の一症例に関する考察」（1909年）に出てくる患者の治療報告である。「ねずみ男」と呼ばれているのは，患者の強迫神経症に，残酷な刑罰である「ねずみ刑」など「ねずみ」の観念がいくつか関わっているからである。そのような呼称から，特別な病歴をもつ，アブノーマルな人間像が連想されるかもしれないが，それはあたらないようだ。本人は大学教育を受け，きちんとした社会生活を送っている，むしろ相当に知的な青年である。また，ことがらの性質上，秘匿すべきプライバシーの問題もあることは，フロイト自身も語っている。したがって，このエルンストと呼ばれる患者についてのフロイトの言述を，そのフロイトの報告する限りで，つまりフロイトというフィルターを通した限りで，情動の発露の諸関係と仕組みを探るべく，先入見なしにわれわれも参照したい。

情動のなんらかの発露は，分析治療においては心的エネルギーとして，神経の興奮として（『科学的心理学草稿』）現象すると言えるので，物理的，力学的比喩で語られることも多い。しかしリオタールは，それをなんらかの文（フラーズ）の発現という切り口で考えるわけである。そこで，物理的，力学的比喩から出発しない言述が志向される。情動の文は，それが分節化せず〈宇宙〉を開かない以上，こごまった，ある気配のみをあてもなく発する沈黙の文か，あるいは泣き声，溜息のような文としてまず設定される。アリストテレスは，分節言語である「言表（*lexis*）」とは異なる，分節されざる声を「フォネー（*phônè*）」と名づけていた[31]。フォネーは「情動であるが，情動がその情動自身のしるしであるかぎりである[32]」。例えば理由や付帯状況をともなうかたちでの（すでに分節化された）悲嘆とか歓喜とかも示しはしない。つまり，情動がそのような情動であることだけを伝える。それは心の状態であるが，それが何であるかはわからない。ただ「プシュケー（心）の状態であるとともに，その状態のしるしでもある」。それは何かを意味するが，その意味するところはそれ自身である。したがって何かはわからない。ただ，何かがそのようにあるということだけである。

このような情動，フォネーを，間接的にせよ，いかに分節することができるだろうか。

> 情動は，死のようなもの，誕生のようなものである。もしそれが考えられ，分節化され，語られるとすれば，それは他者の，他人たちの情動なのである[33]。

情動は，語ることができる。しかしそれは他者が語るのである。自分の誕生や死を自分で語ることができないように（“されど死ぬのはいつも他人なり”），そして他人によってその誕生や死が語られるように，他者が語るのである。そのとき，それは“私”でも“あなた”でもなく，「3人称において[34]」指向対象として分節化されて，語られる。情動は3人称において分節化されるのである。

こうして，フロイトが分析治療の場面でエルンストと向き合っているなかで「他者」が登場する。エルンストは回想する。

> エルンストはフロイトに，「自分はモラルある人間だと思っているが，幼年期に，他者から発せられるようなことがらを，その通りに確かにおこなっていたということを思い出すことができる」と語っている。フロイトは人格の分裂について彼に説明したばかりである。エルンストが苦しんでいる病は，他者に，無意識に由来するのである。フロイトはエ

ルンストがその他者を他者として認めたことを讃える。すなわち，それは，未成熟な幼年（*das Infantile*），中性，三人称である。インファンス（*In-fans*），それはなんらかの声をもつが分節化されていないのである[35]。

エルンストは，自らのなかの幼年期における他者，「インファンス」を3人称としてとらえる。それは，ひとつの進展である。このとき，自分でないようなものとしてとらえられる感覚は，もちろん，過ぎ去った過去のものではない。その分節化されていない声は，気づかれないまま，今「現前」している。

分節化されていない声は，分節化されている声にシールを貼る。私が例えば，反対強迫，適合強迫と言うとき，はっきり分節化されている明晰さのなかに，このようなシール（タンプ）＝響き（ル）があることを告白している。もろもろの情動が，沈黙のうちに，指向対象にかかわる意味作用や，もっとも明白な宛先関係に不法侵入している[36]。

分節化されていない声が，分節化されている声に「不法侵入」することがある。それは，患者と分析者が，患者の語りや回想を通じて，分節化されていない声を聞き取り，それを3人称として語る作業のただなかにおいて感知されうることであろう。そのような「不法侵入」の兆候を，見のがさないこと，そのへんにあたりをつけていくことが，分析者の腕の見せどころと言えるかもしれない。

2　「ねずみ男」の強迫観念

2-1 幼年期の強迫観念

ここに，エルンストのいだく幼年期のひとつの強迫観念が俎上にのせられる。それは，若い娘たちの裸体を見たいという自分の願望にかかわる。その願望を両親は知っているだろう，なぜなら，心のうちを表明しているので，それが自分の耳に聞こえなくても，両親には伝わっているはずだという観念である。

「しばらくのあいだ，私の両親が私の考えを知っているという病的な観念にとりつかれました。そのことを私は次のように解釈していました。私は私の考えを大声で発していたが，それが自分に聞こえることはなかった，というように[37]。」

しかも，それが「病的な観念」であるとエルンストは回想している。

この「解釈」で，何が「病的」なのだろうか。問題になっている言表（*lexis*），エルンストが目下フロイトに向けている言表は，その指向対象(女たち)とその意味（彼女らの裸を見ること）によって，〔言表として〕正常であったし，今もそうである，もしくは偶然的ではなかったし，今もそうである。しかし，その宛先に関しては変調をきたしている，あるいは屈曲されている。すなわちそれは，それが宛先になってもいなかったし，またそうであってはならなかった受け手，つまり両親に差し向けられていたのである[38]。

このようなエルンストの幼年期の観念は，文として考えてみるとき，指向対象と意味に関してはまったく正常である。その意味内容がノーマルかどうかの判断は別問題であり，ここまでは文の組成としてはノーマルである。ところが，この文は，宛先に関しては「変調をきたしている」。つまり受け手になっていない，否，なってはならないはずの「両親」が受け手となっているのである。このような屈曲はなぜであろうか。

エルンストの願望は，一種の内的独白である。内的独白は，情動の純粋な自己表示とは異なるが，そのゆるめられたものととってもいいかもしれない。ともかく無言のフォネーの場合に近いと考えられるが，もしそれが分節化されるとしたら，他人に知られたくないその文は，「私」を受け手とするだろう。つまり，「私」（送り手）が，受け手（きみ）としての「私」に語りかけるモノローグである。ところが，この送り手 - 受け手の分節関係を，潜勢状態にある分節化されていない情動が圧迫し，浸透し，大きく屈曲するかたちで作用を及ぼしている。「不法侵入」しているのである。

こうして，エルンストの考えは，文として，自分に聞こえることなく（自分が受け手となることなく），両親に伝わっている（両親が受け手となる）。自分（「私」）に聞こえない以上，送り手としての「私」の場も危うくなる。そもそも両親は，私の考えを知っている。それでは「私」の考え，文は，いったいだれのものなのか。いったいだれが送り手なのか。

たしかに送り手が「私」であるなら，その独白の受け手は「私」であり，そのことでその内容たるべき願望は，「私」のなかにかくまわれているはずである。しかし私は受け手にならず，両親が受け手となっている。受け手になりそこねているわけであるから，そのような送り手となる「私」を否認し，自分にたいして抑圧していることにもなる（「私」がもしそのような考えをもったら父の死をまねくという強迫観念をエルンストはもっている）。

このように送り手と受け手の関係は捩られている。そういうかたちで抵抗がなされ，言表（*lexis*）のいわば現成が拒まれていると言えるかもしれない。ひとつのなかに二つの声[39]。エルンストは，自分のいだく矛盾的な妄想，それが「病的な観念」であると認識している。

2-2　情動の解放

以上のような宛先の捩れ，背反関係，そのことが，エルンストとフロイトの治療の場面でもキーポイントとなる。とはいえフロイトは，患者の話を聞いて，それに分析をあたえ，患者に新たな知見をあたえる知の所有者の立場にあるのではない。精神分析の治療の場面ではしばしばそう想像されがちであるが，フロイトはそのように考えていないとリオタールは言う。

> きみに当たるものは，名づけられないままでいるようにつとめるのであり，その位置はあらかじめ占められているのではない。数々の宛先に差し出されている，空虚な，たんなる代名詞である。フロイトはこうして，対話者の機能，つまり対話の関係が要求する，知をそなえた対話者という機能を弱めている。この中和化によって，ほとんどあるいはまったく宛先のない情動的な声に，言述のはっきり分節化された声のなかで，より多くはたらく余地をもたらすという効果が生じる[40]。

受け手のポストをほとんど空席にすること，そのことによって何が生じるのだろうか。エルンスト（送り手）は，フロイト（受け手）に自分の回想や連想（指向対象・意味）を語りかけている。そのような分節化された文の連鎖には，分節化されない文が絡みついていると考えられる。しかし，受け手の位置に知の所有者フロイトがどっかりと構えていれば，なにか知を授けられるのではないかという期待がエルンストに生じるだろう。エルンストの「情動」は，むしろ指向対象の極に磁化され，知的に対象化されつつ，分節化された文のなかにのみ定位され，新たな〈情動 - 文〉が発露されるのは抑制されるだろう。

それにたいして，受け手の位置がほとんどからっぽな「きみ」の空席になったとしたらどうだろうか。エルンストが180度回転してその空席に少なくとも仮想的に移ることは考えられるし，また3人称の指向対象の自由度も増すだろう[41]。そうするうちに，話し手であるはずのエルンストの自己同一性もあやふやになり，送り手の位置も，現実のエルンストというには曖昧になるかもしれない。語られる声が，そのように曖

昧に分節される文になる可能性が大きい。しかも，そのとき同時に，その状態を抑制することなくそれに交叉しうる，分節される文の地平も開かれている。そのような状況のなかで，「ほとんどあるいはまったく宛先のない情動的な声に，言述のはっきり分節化された声のなかで，より多くはたらく余地をもたらすという効果が生じる」のである。

実際，分析治療のクライマックスの直前には，エルンストの感情転移の激しさが増していく。フロイトは，「彼はしだいに私（分析医）と私の一家に対して夢や白昼夢想や連想の中で悪口雑言の限りをつくすようになった[42]」と語っている。聞くに耐えないフロイト本人や家族にたいする侮辱のことば。しかし「意識的には，もっぱら私に最大の敬意のみを捧げていた[43]」ということから，転移の試練，困難，苦しみの一端がわれわれにもうかがえるわけであるが，このような歯止めなく奔出する語りのなかで，到来しうるものは何だろうか。

リオタールは，留保つきながら，分析の場面をギリシア悲劇の場面に見立てる。とくに舞台上の主人公とコロス（合唱隊）の関係に着目する。コロスは，あるいはコロスの代表者は，しばしば主人公の話し相手となり，主人公をみずからの真実の発見に導く手助けをする背景的な役割を演じる。ギリシア悲劇には，「主人公の聾が，彼に聞こえていなかったことの聞き取りに逆転する」ような「区切りの瞬間[44]」がある。エルンストの想起する強迫観念で代表される文の宛先の捩れ，背反関係そのものが，この分析治療の「私」，「あなた」の場面で，どのような宛先をめぐる出来事となりうるだろうか。リオタールはその瞬間を以下のように語る。

> しかしそれでもなお，分析の場面でも，以下のような古代悲劇の特徴が残ることだろう。すなわち，コロスあるいはコロスから出てくる登場人物たち（分析者の“きみ”によってほとんどからっぽにされた席を占めに来ることのできるすべての者）が，そのような他者が，主人公（患者）によって直接襲われて，舞台裏に，つまり生と言われるその患者の舞台にひきずりこまれるときに，効果をうむ逆転の瞬間である。その瞬間，転移の（ひとつの転移の）主人公は，つまりその舞台裏から出てきたフォネーは，今まで聞こえていなかったが，今，自分の言っていることが聞こえるようになる。なぜなら，フォネーは，今はきみに，したがって主人公である私に，患者に差し向けられているからである。パフォーマンスのおかげで，情動の撓まない今が，分節化された声の（とくに時間的な）屈折にしたがう今において，現実化されるのである[45]。

ほとんど空席になった〈受け手〉の場に充当されうるあらゆる相手を主人公は攻撃し，相手もろとも「舞台裏」にひきずりこむ。〈送り手〉も〈受け手〉も一瞬空席になる。その自由度を増した舞台に「舞台裏」からフォネーが現われ，声が発せられ，宛先の定められる機会があたえられる。分析の舞台への，主人公の物語るもろもろの声のラッシュのなかで，その極点で，情動的なフォネーが聞きとれるように，フォネーに「差し向けられる機会[46]」があたえられるのである。主人公の情動が，例えば身近な人々にたいする愛憎にまつわる事実として，聞きたくなかったこと，認めたくなかったことが，聞かれるようになるのである。

エルンストは，自分には聞こえることなく自分の密かな願望を両親に語っているというオプセションに悩まされていた。これはフロイトの言うように，エルンストにあっては原型的な強迫観念である。その原型性から，リオタールはそれを特に，宛先関係の屈曲，背反として注目したわけである。そのような分節化に支障をきたしている〈文〉を，なんらかの分節文に接続していこうとする試みが語られているわけである。そのとき，宛先の捩れを解くことになる〈文〉は，原型的な強迫観念の〈文〉そのものの解きほぐしとしてあらわれるわけではない。なぜなら，段階を追うわけではないからだ。〈情動 - 文〉は，現在の，今あるところの〈文〉であるからだ。なにかがあることが，その切迫性が，きっかけを通じて奔流のように流れ出すことがある。しかしそれは，くだんの情動の説明的解きほぐしとして成るわけではない。

> 情動を解放することは，それを語ることではない。それがあった通りに記述するということではない。というのも，それは，過ぎ去る時間を無視するからであり，現にあるところのものにほかならないからであり，快，苦痛，悦び，今であるからである。それは，今，情動がみずからの今をみずからに殺到させることになるような物語を，物語る（構築），あるいは物語られるがままにする（脱構築，自由連想）ことである。こどもや強迫症患者の分析の見出しとなる，あるいはひょっとしたらなるかもしれない動物の名は，フロイトの使う，狼，ねずみ，馬は，もろもろの情動の軽はずみを名づけているのである[47]。

エルンストのケースでは，クライマックスで奔出したのは，あるいはそのようにフロイトが拾い上げたのが，ねずみにまつわる観念，連想であった。ねずみ，肛門性感，大便，金銭といった象徴的連関だけでなく，「ねずみ（Ratten）」，「分割払い(Raten)」，「結婚する(heiraten)」[48]などの連想事項も，ここではとりあげなかったが，エルンストの述懐する軍事演習経験時のトラブルを読み解くための重要な要素であった。フ

ロイトはこの機を逸せずに，それらを総体的に編み直していくのだった。

きみの位置がからっぽになる，そのような，宛先の余地，ひろがりのなかで，飛び跳ねたのが，ここではねずみとねずみ観念にかかわる諸事象であった。それが，エルンストのケースの「情動の軽はずみ」であった。そして最後に留意すべきことは，この症例が指し示すところを，われわれに縁遠い特殊な事例と見てはならないだろうということである。「情動」は，「情動の軽はずみ」は，われわれすべてにかかわる。われわれも，われわれの回想と忘却において，気づかれない意識のしこりにおいて，日頃の言動にひそむ空隙と，はたと振り返る見知らぬ自己との関係において，なべて“ねずみ男”，“ねずみ女”となりうるのである。

むすびにかえて

リオタールが「情動」に着目して思考をすすめるのは，われわれが自明であるかのように人間世界，自然世界と口にしつつ語りやまないまえの，それらの語られる分節化されたことばの連なり以前の“問い”の根本が，その肝心かなめが，分節化されていない〈文〉である「情動」にこそあると考えるからである。「情動」をなんらかのかたちで表現にもたらすこと，しかもそのプロセスそのものが思考の営みとなるような言述こそ，リオタールは求めていたと思われる。

エマの症例においては，「事後性」としてしか露呈しない「無意識的情動」の発現のしかたと，〈文〉の争異を手がかりとして，見えるものとして呈示されない，それ自身でしかない情動の「現前」性が浮き彫りにされた。そして，エルンストの症例では，分節化される〈文〉に干渉する分節化されない〈文〉，そのようなフォネーになんらかの分節，差し向けの機会をあたえること，つまり情動をその言いよどみ，失調から解放すること[49]が求められていたとリオタールは見る。みずからにも知れぬ情動を，その「分節可能なものの手前」を分節化しようと試みること，それが，みずからを問う思考のなすべきことだからである。

「情動」の考察は，もちろんこれでは終わりでない。そもそも「情動」の言述化に終わりというものがあるかどうかという根本的な問いは別にしても，エルンストの症例に関して，自分の発する声が自分に聞こえるという形式を回復すべき基準枠としたが，その際，自分で自分を聞くということがそもそも自同的であるかどうかという別な問いが生じうることを忘れてはならないだろう。本稿ではその問題点は示唆するにとどめたが，リオタールは，『聞こえない部屋』（1998 年）で，分節化されない「情動」，聞き取れないフォネーに関連させて，この問いの領域をさらに追求している。

われわれはその点を課題とし，考察は別な機会に譲りたい。

註

1) Jean-François Lyotard, *Misère de la philosophie*, Galilée, 2000, p.45.　以下，*MP*と略記。拙論「ジャン=フランソワ・リオタール『哲学の悲惨』に関する若干の考察」(『駿河台大学論叢』第29号，18頁）参照。

2) *MP*, p.60.　またリオタールは，カントの『純粋理性批判』に挙げられている「4つの無 Nichts」に言及している。経験から得られる実例なしに思考される「対象なしの空虚な概念としての無」，対象の欠如にかかわる「概念の空虚な対象としての無」，純粋空間，純粋時間など，それ自身は直観される対象ではない「対象なしの空虚な直観としての無」，そして自己矛盾する(2辺からなる図形など)概念の対象は無であることから「概念なしの空虚な対象として」の「無」の4つである。『純粋理性批判　上』（イマニュエル・カント，原佑訳，平凡社ライブラリー，2005年）529 - 530頁参照。そしてリオタールは，4番目の“概念なしの空虚な対象としての無”を，「非 - もの」(la non-chose）と呼び（*MP*, p.58)，それはジャック・ラカンによって「もの」(la Chose）と呼ばれていると語っている（*MP*, p.59)。

3) 幼年期は身体的に無力なだけでなく，感覚，思考も非力である。「たましいを構成する虚弱さ，その幼年期あるいはその悲惨」(Jean-François Lyotard, *Heidegger et 《les juifs》*, Galilée, 1988, p.38.　以下，*HJ*と略記)。拙訳『ハイデガーと「ユダヤ人」』，藤原書店，1992年，45頁。

4) *MP*, p.66.

5) 「無意識について」(1915年）（井村恒郎・小此木啓吾他訳『フロイト著作集』第6巻，人文書院，1969年）参照。

6) Sigmund Freud, *GESAMMELTE WERKE, Nachtragsband*, S.Fischer Verlag, 1987,p.445. 懸田克躬・小此木啓吾訳『フロイト著作集』第7巻，人文書院，1974年　282頁参照　一部変更）なお，t_1時のエマの年齢は，前者で「12歳（zwölf Jahre)」(p.445）とあるので，それにしたがった。

7) *Ibid.*, p.446. 同書，283頁。

8) *Ibid.*, p.447. 同書，284頁。

9) *MP*, p.79.

10) *Ibid.*, p.61.

11) *Ibid.*, p.65.

12) *Ibid.*, p.83.

13) *Ibid.*, p.76.

14) *Ibid.*, p.87.

15) *Ibid.*, p.61.

16) *Ibid.*, p.88.

17) *Ibid.*, p.69.

18) *Ibid.*, p.69.

19) *HJ*, p.35. 拙訳 42 頁

20) *Ibid.*, p.36. 拙訳 43 頁

21) *MP*, p.70.

22) *Ibid.*, p.81.

23) *Ibid.*, p.84. ジャック・ラカンの 「もの」(la Chose) を示唆している。このような「もの」は，実体概念としてとらえるべきではないと考えられる。若森栄樹『精神分析の空間』(弘文堂，1988 年) 181 頁参照。

24) *Ibid.*, p.91.

25) *Ibid.*, p.91.

26) *Ibid.*, p.84.

27) *Ibid.*, p.94.

28) Freud, *op.cit.*, p.445. 「しかもはじめの時にこのような目に遭ったにもかかわらず，彼女はもう一度出かけていった。二度目以後彼女は，そこに足をふみ入れなかったが，今になって彼女は，そうすることでまるでこの秘密の悪戯を誘発しようと望んでいたかのように，二度も出掛けていった自分を責めているのである。」(『フロイト著作集』第 7 巻，282 - 283 頁)

29) *MP*, p.94.

30) *Ibid.*, p.94.

31) Jean-François Lyotard, *Lecture d'enfance*, Galilée, 1991, p.133. 以下，*LE* と略記。翻訳『インファンス読解』(小林康夫他訳，未来社，1995 年)。本稿では以下，拙訳を試みた。

32) *Ibid.*, p.134.

33) *Ibid.*, p.137.

34) *Ibid.*, p.137.

35) *Ibid.*, pp.137-138.

36) *Ibid.*, p.139.

37) *Ibid.*, p.140. Sigmund Freud, *GESAMMELTE WERKE, Chronologisch Geordonet VII*, S.Fischer Verlag, 1941, pp.389.

38) *Ibid.*, p.141.

39) *Ibid.*, p.141.

40) *Ibid.*, p.143.

41) 治療において「テクスト」は，「意味に関する非 - 規則化（自由連想）という規則」と「受け手に関する非 - 規則化という規則（転移）」のもとに〈文〉となるとリオタールは言っている（*MP*, p.66）。

また，エルンストが，自分の立場や欲望を他に移し変える「転移空想」によって，意識されない自分の情動を語るようになるのも，情動の分節化の例であろう。「彼〔＝エルンスト〕は，転移空想 Übertragungsphantasie の助けをかりて，自分が忘れていた過去のこと，あるいはただ無意識にとどまっていたことを，新しいこと，現在のこととして als neu und gegenwärtig 体験するようになった」（小此木啓吾訳『改訂版フロイド選集・16　症例の研究』，日本教文社，1969年，55頁）。

42) 同書，66頁。

43) 同上。

44) *LE*, p.149.

45) *Ibid.*, pp.150-151.

46) *Ibid.*, p.152.

47) *Ibid.*, p.152.

48) Sigmund Freud, *op.cit.*, pp.432-435.『改訂版フロイド選集・16　症例の研究』，71 - 75頁。

49) *LE*, p.152.